

## 会員の広場



### 歴史的町並みとの出会い

瀧口勝行（東京）

もう、かれこれ40年近くも前になるが、ローテンブルクを初めて訪れた時の、あの感慨を私は今も忘れることができない。中部ドイツの田園地帯を延々と走った後、突然、霧が晴れたように眼前に現れたのは、日本では見たこともないような町の姿だった。

聳えたつ教会の尖塔や城門の櫓、立ち並ぶ赤瓦の破風屋根、城門からずっと続いている石畳の舗道。そし

てこれらのものをすっかり囲んでいる城壁。初めての海外生活をここで送ろうとしていた私は、まるで中世そのものが出現したような町の姿を前にして、一瞬たじろぎすら覚えたのを思い出す。

毎日通ったドイツ語学校までの石畳の道、色とりどりの花が飾られた古い窓。いつ、どんな所にも町の全体が自分自身の中にある。それほど小さな町だ、という言い方もできるだろう。しかし、町とは、都市とは、本来そのようなものではないだろうか。住民一人ひとりの中に町の全体像が宿ることができる空間、それを長い歴史を通じて共有し続けてきた誇り。私はこの町に暮らして、現代の都市が失ってしまったものが何なのかを、あらためて実感できたような気がした。一体この町は、どうしてこのように中世そのままの姿で現代まで生き続けることができたのだろうか。滞在半ばにして、町の本当の歴史を知った時、驚きと新たな感動が加わった。

1945年3月の大空襲によってローテンブルクは壊滅的な打撃を受けた。そして市民の力によって昔のままの姿で再建されたのだという。町を取り囲む城壁の内側を歩くと、数メートルおきに石板がはめ込んである。そこには「1946年×月×日、警察官グループを再建す」「1946年○月○日、警察官グループこの部分を修復す」といった記録がずらりと刻み込まれていた。力あるものは力を、財力のあるものはカネを、知恵あるものは知恵を出し合い、まさに市民の総力によって町はかつての姿を取り戻した。

ローテンブルクは、単にその歴史的景観が「残った」町ではなかった。それは、市民たちが美しい町並みへの強い愛着と誇りを持ち、長い歴史を通じて自らを「再生」し続けてきた町、というべきであった。都市とは単なる生活機能を持った空間ではない。真の都市とは、歴史的な時間軸のなかで培われる、人間のアイデンティティそのものである。

わが国でも、妻籠を嚆矢として近江八幡、内子など多くの地域で歴史的町並みを核とした町づくりが試みられているが、そこには多くの共通点がある。その一つは、ローテンブルクもそうであるが、これらの町はすべて近代化や産業化から取り残された地域だったという点であり、もう一つは、歴史的町並みを保存し、町を再生しようとする事業が住民自身によって始められたという点である。人々を突き動かしたものは、消滅しようとする故郷を守ること、それはすなわち断ち切られようとする自分自身のアイデンティティを守ろうとすることだったのだと思う。

これらの町を旅していつも感じるのは、ある種の優しさや安らぎの空気だ。それは、確かに、ローテンブルクの城門に刻まれたあの有名なラテン語のフレーズに共鳴する、他者への思いやりの精神に違いない。

*Pax Intranitus* 入り来る者にやすらぎを、

*Salus Exeuntibus* 去りゆく者に幸せを